

「対話式絵本の読み語り」で育くむ、 こどもの「ことば」

井原太一（こどもの成長を護る杉並ネットワーク 代表）

◇はじめに◇

私たちは、絵本が子供の心の成長にとってとても大切であり有効であると考え、対話式絵本の読み語り（読み聞かせ）による「おはなし会」の開催、保護者や地域の方々を対象とした「絵本講座」の開催、「絵本講師の養成」、「出張講座・講師派遣」の受託、活動紹介の「展示会」開催、「絵本コンサート」の開催、行政や他のNPO団体との協働など、子供たちの心を育てる参加型の「対話式」絵本の読み語りの普及活動を、かれこれ14年間続けて来ました。

前回は、2013年東京大会のポスターセッションで発表させていただきましたが、そのときは対話式絵本の読み語りの全般について、語らせていただきました。

概略を以下にまとめると・・・、

◇子供の成長に合わせた調理、読み語り◇

絵本の読み聞かせの方法は、一通りではない、子供の成長の度合いにあわせて、読み方は変えても構わない、という考え方から始まります。

すなわち子供の成長にとって、絵本は心の食事です。食事を料理に例えれば、まずは栄養のある良い食材を選ぶこと、これは心の栄養になる良いテーマをもった絵本を選ぶことです。そして、もうひとつ大切なことはその子の年齢や状態に合った調理をしてあげること。いくら良い食材であっても、その子が食べられる調理をしてあげなければなりません。つまりその子の年齢や心の状態に合った読み語りをしてあげることが大切です。ですから、子供に合せて様々に変化してあたり前。その心の状態、その子が絵本や物語に対してどのくらい興味を持ち、取り組む力を持っているのか、それを私たちは「対話」の中から探っています。

私たちは「シーツ、黙って静かに聞いていなさい」とは言いません。子供が絵や物語に刺激を受ければ、声が出て、手が出て、足が動くものです。その心の芽を大切に伸ばしてあげる。

子供たちは、絵本の中で、主人公と共に冒険をしたり、泣いたり笑ったり、そして心の豊かさを育みます。

「対話式」絵本の読み語りは、そのような子供たち



の心を後押しし、想像力、思考力、創造力など、人としての基本的な心の力、自立した心を育てて行きます。

また、対話式絵本の読み語りは、子供が育つ家庭環境を整えます。親が対話式で読み語りをすることで、親子の対話、コミュニケーションが盛んになり、親子が心を通わせ合います。親は子供の心の状態や変化を知ることができ、子供は家庭が自分にとって安心できる居場所であることを確認し、これらが相乗して子供たちが育つための安定した家庭環境づくりに役立つものとなるでしょう。

そして、絵本に含まれる心の栄養は、親自身にとっても、心の癒しと共に、自身の心を育てることに役立っています。

このようなことをベースに活動していることを、前回は述べさせていただきました。

◇ことば力を育てる◇

さて、絵本の読み語りには、言うまでもなく別の側面、効用もあります。それは、「ことば」を覚えることです。

1. 感情の表現

ことばは、他者とのコミュニケーションを図る手段であったり、文字と共に話を伝え残したりできるものですが、人間が感情動物である以上、その背景には人の感情が存在しています。

ですから「うれしい」という単語には、人のうれしさの感情があり、「悲しい」という単語には、悲しい気



持ちが宿っています。絵本の悲しい場面で、明るく元気よく語ってしまっただけでは、その場面がよく伝わりません。私たちは、対話式の中で、悲しい時は悲しいという気持ちを込め、うれしいときは喜びの気持ちを込めて語ります。

読み聞かせの方法の一つとして、語り手がことばに感情を入れてはいけない、というやり方があります。感情の内容や大小は物語の中で聞き手側がつくり上げて行くもので、そこに語り手の主観が介入してはいけない、という考え方ようです。もちろん、それが出来る年齢、心の状態の子供たちに対しては、その方法がよいでしょう。

しかし、子供たちのすべての年代にそれが適用できるものではありません。自分で物語中の感情世界をつくり出せるのは、自分がそのことばの意味を知っていて、またその感情を経験したり見聞きしたりしたことがあるからです。そもそも「悲しい」という単語を知らない子供は、物語の中で「悲しい」と言われても、何のことだか分かりません。

知らない子供に対して、感情を入れずに淡々と語ってしまっただけでは、「悲しさ」の心が伝わりません。その子供に対しては、私たちは「悲しさ」の気持ちを込めて語ります。

絵本の物語のなかで、子供たちは、ことばには喜怒哀楽があることを感じ取って行きます。

2. 正しい日本語、うつくしい日本語

現代の子供の居る環境の中には、テレビやゲームなど、片言ことばが氾濫しています。主語、述語などがきちんと整った「ことば」に出会いにくい環境です。少子化が進み、子供たちが群れて遊ぶ機会も少なくなり、会話の機会が減ると、なおさらことばで文章をつくることをしなくなってしまう。

他者とのコミュニケーションを成り立たせる上で「ことば」は大切です。「対話式」読み語りの中では、子供の心の状態に応じて、絵本の本文を短くしたり、わかり易くしたりすることがありますが、しかしその時でも、日本語としての形、美しさなどは無くさない

ようにできるだけ配慮しています。

文体の正しい日本語、うつくしい日本語は、就学後に学べるものではありませんが、ことば・文章がそのような形を持っているということ、就学前に体得させておくことは、大切なことだと考えています。

絵本の読み語りを通して、ことばを投げかけ続けることは、有効であると考えます。

3. 論理的思考の基礎

人は論理的思考をするときに、その根底には言語、ネイティブ・ランゲージがあるといいます。日本で生まれ育っているのであれば、日本語がそれにあたります。この日本語がきちんと話せることは、その子が成長して、将来勉強するにしても、他人と会話し、交渉するにしても、必要となる論理的思考の原点になります。

その意味で考えれば、幼少時にまず学ぶべきは“正しい”日本語であり、英語やその他の言語はそのあとでもいい、ということになります。

ですから、日本語にたくさん触れること、ここでも絵本の読み語り貢献しているのです。

4. 決して強制をしない文字への巣立ち

やっと文字が読めるようになり始めた子に、「あなたはもう字が読めるのだから、自分で読みなさい」と突き放すことを、私たちは決してお勧めはしていません。そのようにすると、なかなか一人では読み進めないで、その子は絵本や文字から離れて行ってしまいます。

子供たちが満足するまで、何度でも絵本を読んであげる。絵本の中で、子供たちは新しい冒険に出会い、ことばに出会い、人の生き方に出会い、人の喜怒哀楽を感じ取って行く。

絵本を通して物語の面白さを知った子供は、成長して行きながら大人が言わなくても自分で本を読み始めるようになるものです。

そのような子は、決して文字離れをしない実例を、私たちはいくつも見て来ました。

【こどもの成長を護る杉並ネットワーク】

こどもを持つ親や教育関係者がボランティアでつくれた任意NPO(非営利市民活動)団体です。こども達の心身共の健全な成長を応援(援護)し、有害な環境から守り(守護)、困難から抜け出すお手伝い(救護)することを目的としています。特に、こどもの成長にとって家庭のあり方が大切と考え、ご家庭で出来る対話式「絵本の読み語り」の紹介と普及運動を進めています。(設立 2002年5月)

<http://www.kodomo-net.org>
E-mail: info@kodomo-net.org